頬部に発生した多形性腺腫の1例

渡辺 裕三・小原 希生・相良 成実・鈴木 茂
齊藤 文明・鮎瀬 公彦・田辺 晴康

A case of pleomorphic adenoma of the cheek

YUZO WATANABE・SHIZUNARI OBARA・NARUMI SAGARA・SIGERU SUZUKI
FUMIAKI SATTO・KIMIHICO AIGASE・HARUYASU TANABE

Abstract: Pleomorphic adenoma is the most common tumor found in the salivary glands. Its most common site is the parotid gland in the major salivary glands, and the palate in the minor salivary glands. Among the minor salivary glands, incidence at the cheek is comparatively rate.

We recently experienced a case of pleomorphic adenoma of the cheek. The patient was a 63 year old man who complained of swelling in the buccal mucosa. The tumor was enucleated under general anesthesia. Pathological finding showed pleomorphic adenoma. Prognosis was excellent, and there is no evidence of recurrence.

Key words: pleomorphic adenoma, minor salivary gland

緒 言

多形性腺腫は、唾液腺腫瘍の中で、最も頻度が高く、大唾液腺、特に耳下腺に多く認められる。小唾液腺では、口蓋部に多く認められるが、頬部、口唇部、舌および口底部では、比較的まれなようである。今回、われわれは、頬部に発生した多形性腺腫の1例を経験したので、若干の文献的考察を加え、報告する。

症 例

患 者：■歳 男性。
初 診：昭和62年3月■日。
主 訴：右側頬部腫瘍。
家族歴：特記事項なし。
既往歴：60歳時より、高血圧症にて加療中。
現病歴：昭和■年■月初旬、義歯作製のため、某歯科医受診。その際、右側頬部の腫瘍を指摘され、当科に来院した。

現 症

全身所見：体格中等度、栄養状態良好
顔貌所見：左右対称で、右側頬部の腫脹、および、自発痛、圧痛は認められなかった。また、所属リンパ節は触知しなかった。
口腔内所見：右側頬粘膜部で、耳下腺開口部後方に膨隆を認め、被覆粘膜は、健常色を呈しており、くすみ大の弾性硬で、可動性を有する腫瘍を触知した(写真1)。
臨床検査所見：血清生化学検査において、 γ -GTPの軽度上昇を認めた以外、すべて正常範囲内であった。
X線所見：オルソパントモグラムの写真では、特に異常所見を認めなかったが、X線 CT では、写真に示すごとく、

写真1 初診時口腔内所見

東京慈恵会医科大学歯科学教室

(主任：田辺晴康教授)

Department of Dentistry, The Jikei University
School of Medicine(Chief: Prof. Haruyasu Tanabe)

受付日：昭和63年1月22日

写真 2 初診時X線 CT 所見
(↑印は, high density area を示す)。

写真 5 病理組織所見 (H-E 染色, ×40)

写真 3 摘出物

写真 6 病理組織所見 (H-E 染色, ×100)

写真 4 摘出物剖面

写真 7 病理組織所見 (H-E 染色, ×400)

右側下顎枝前縁に, 境界明瞭な high density area を認めた (写真 2 矢印)。

臨床診断: 右側頰部良性腫瘍。

処置および経過: 右側頰部良性腫瘍の臨床診断のもと, 昭和62年4月■日入院, 同年4月■日, GOE 全身

麻酔下にて, 腫瘍摘出術を施行した。右側耳下腺開口部後方約 10 mm の位置より約 20 mm の切開を加え, 腫瘍の周囲組織を鈍的に剝離し, 腫瘍を一塊として摘出した。腫瘍は, 被膜によって覆われており, 周囲組織との癒着は認められなかった。術後の経過は良好で, 現在まで再発は認められていない。

摘出物所見: 腫瘍の大きさは, 30×25×25 mm で弾性硬 (写真 3), 剖面は充実性の組織で構成され, 乳白

写真 8 病理組織所見 (H-E 染色, ×400)

色を呈していた (写真4)。

病理組織学的所見：典型的な多形性腺腫の組織像を呈しており，上皮性細胞成分と，間葉性細胞成分が混在し，上皮性成分では，腺管構造を示す部分や，索状の胞巣を形成している部分があり，間質部分では，一部硝子化した部分や，軟骨様部分も認めた (写真5～8)。

病理組織学的診断：多形性腺腫。

考 察

多形性腺腫は，Willis¹⁾，Bauer ら²⁾によって，唾液腺腫瘍の分類法が報告されてから，上皮性起源の腫瘍に属するものとされ，その発生源は，唾液腺の小導管部，あるいは，終末部と考えられている。

一般に多形性腺腫の発生頻度は，唾液腺腫瘍の中で最も多く，60～65%を占めるといわれており³⁾，その中で，小唾液腺由来の腫瘍は，唾液腺腫瘍の10～20%といわれている⁴⁾。小唾液腺では，口蓋部に比較的多く認められ，頰部における発現頻度は，Hendrick⁵⁾ 13.6%，Frible⁶⁾ 13.9%，西嶋ら⁷⁾ 2.9%，藤林ら⁸⁾ 10.3%，茂木ら⁹⁾ 7.6%，白川¹⁰⁾ 3.8%といずれも少なく，われわれの渉猟し得た症例も，過去10年間で19例であることから，かなりまれであると考え (表1)。

本腫瘍の発生年齢は，20～60歳代と，比較的幅広い分布となっており^{2,4,10)}，平均年齢についてみると，Epker ら¹¹⁾41歳，Chandhry ら⁴⁾ 48.5歳，本邦では，藤林ら⁸⁾ 44.6歳，白川¹⁰⁾39.4歳となっている。性別では，女性に多いという説^{1,3,10,12)} と性差はないという説⁹⁾があるが，自験例を含めた今回の19症例においては，平均年齢51.0歳で，19例中女性13例と，女性に多い傾向を示した。なお，自験例は，63歳男性であった。

本腫瘍の診断に関しては，耳下腺との関係を調べるためのX線造影が不可欠であるが，加えて，X線 CT は，腫瘍の範囲，周囲組織への浸潤の有無，良性，悪性の鑑別など，本腫瘍の診断に有意義な情報をあたえてくれ

表 1 頰部に発生した多形性腺腫報告例
(本邦, 1978～1987)

No.	報 告 者	年齢	性別	左右別	大きさ
1	白 川 ¹³⁾ (1978)	72	男	右	不 明
2	深 谷 ¹⁴⁾ (1979)	45	女	左	小指頭大
3	深 谷 ¹⁴⁾ (1979)	41	男	右	小指頭大
4	坂 元 ¹⁵⁾ (1981)	60	女	左	鶏 卵 大
5	黒 川 ¹⁶⁾ (1982)	42	女	右	拇指頭大
6	高 木 ¹⁷⁾ (1982)	40	男	右	示指頭大
7	山 本 ¹⁸⁾ (1982)	33	女	左	不 明
8	三 角 ¹⁹⁾ (1982)	36	男	左	くるみ大
9	梶 ²⁰⁾ (1982)	75	女	左	拇指頭大
10	河 野 ²¹⁾ (1983)	51	女	右	拇指頭大
11	宇 沢 ²²⁾ (1983)	26	女	左	くるみ大
12	藤 元 ²³⁾ (1985)	68	男	右	拇指頭大
13	笠 倉 ²⁴⁾ (1985)	41	女	左	示指頭大
14	笠 倉 ²⁴⁾ (1985)	74	女	左	小指頭大
15	伴 ²⁵⁾ (1986)	55	女	左	くるみ大
16	久保谷 ²⁶⁾ (1986)	51	女	左	鶏 卵 大
17	久保谷 ²⁶⁾ (1986)	35	女	左	鶏 卵 大
18	川 村 ²⁷⁾ (1987)	62	女	左	拇指頭大
19	自 験 例	63	男	右	くるみ大

る。われわれは，自験例に対し，耳下腺造影を施行したが，特に腫瘍との関係は認めなかった。X線 CT では，腫瘍部と考えられる位置に，high density area を認め，下顎枝前縁で，咬筋内側に位置することより，耳下腺および副耳下腺との関係を否定できると考える。

本腫瘍を病理組織学的にみると，複雑多様な像を呈し，同一腫瘍でも，部位によって，像が異なるという特徴がある。上皮成分と間葉成分の割合は種々で，上皮細胞は，腺管状円柱腫状，腺房状の胞巣を作り，間質は，線維性，粘液腫性組織，あるいは軟骨様組織からなり，時に，硝子化を示す部分も認められる。本症例では，上皮性部分において，腺管様構造や索状の胞巣を認め，間質部分では，粘液腫様構造を示す部分が大半を占め，硝子化した部分や，軟骨様部分も，わずかではあるが，存在していた。

本腫瘍に対する治療法として，外科的に切除する方法が主として用いられている。これは，一般に腫瘍が被膜により被包されていることが多いためであろう。しかし，被膜外への腫瘍の増殖を認めることもあり，周囲健康組織を含めた切除が望ましい。今回の症例は被膜により被包されており，皮膚との癒着は認めず，一塊として摘出できた腫瘍であった。本腫瘍の再発率に関して，白川¹⁰⁾は149例中，11例 (7.3%)，藤林ら⁸⁾は97例中1例を報告しているし，山本ら¹⁸⁾の術後15年後の再発症例

や、川村ら²⁷⁾の再発をくり返した症例の報告がある。また、悪性化についても、少数ではあるが報告されていることより⁸⁾、今後長期にわたる経過観察が必要と思われる。

結 語

われわれは、■歳男性の頬部に発生した多形性腺腫の1例を経験したので、報告した。

本稿の要旨は、昭和62年6月27日第138回日本口腔外科学会関東地方会において口演発表した。

引 用 文 献

- 1) Willis, R.A.: Pathology of Tumors. 1st ed. Butterworth, London, 1948, p 320.
- 2) Bauer, W.H. and Bauer, J.D.: Classification of glandular tumors of salivary glands. Arch path 55: 328-346 1953
- 3) 石川梧朗監修: 口腔病理学Ⅱ. 改訂版, 永末書店, 京都, 1982, 718~728頁.
- 4) Chandhry, A.P., Vickers, R.A., et al.: Intra-oral minor salivary gland tumors. Analysis of 1414 cases. OS OM OP 14: 1194-1226 1961.
- 5) Hendrick, J.W.: The treatment of tumors of minor salivary glands. Surg Gynecol Obstet 118: 101-111 1964.
- 6) Frable, W.J. and Elzay, R.P.: Tumors of minor salivary glands. A report of 73 cases. Cancer 25: 932-941 1970.
- 7) 西嶋克巳, 日高豊蔵, 他: わが教室における唾液腺腫瘍の臨床統計的観察. 日口外誌 19: 348-352 1973.
- 8) 藤林孝司, 小幡幸男, 他: 小唾液腺腫瘍の臨床的研究. 口科誌 21: 901-928 1972.
- 9) 茂木克俊, 大畑直暉, 他: 頬部小唾液腺に原発した良性多形性腺腫の5例. 口科誌 19: 222-229 1970.
- 10) 白川正順: 唾液腺腫瘍の臨床病理学的研究. 慈医誌 95: 1402-1419 1980.
- 11) Epker, B.N., Henny, F.A., et al.: Clinical histopathologic and surgical aspects of intra-oral minor salivary gland tumors. Review of 90 cases. J Oral Surg 27: 792-804 1969.
- 12) 斉藤利夫, 手島貞一, 他: 唾液腺腫瘍の臨床統計的研究. 口科誌 21: 154-165 1972
- 13) 白川正順, 岡 和雄, 他: 多形性腺腫の4例. (抄) 日口外誌 24: 1338 1978.
- 14) 深谷忠芳, 古賀一郎, 他: 頬部に発生した多形性腺腫の2例. 日口外誌 25: 313-316 1979.
- 15) 坂元晴彦, 朝倉昭人, 他: 頬部に存在した多形性腺腫の1例. 日口外誌 27: 878-881 1981.
- 16) Kurokawa, H., Torigoe, Y., et al: Pleomorphic adenoma of the cheek. 九州歯会誌 36: 358-366 1982.
- 17) 高木澄雄, 大津淳一郎, 他: 頬部に発生した多形性腺腫の1例. 日口外誌 28: 306-309 1982.
- 18) 山本悦秀, 小浜源郁, 他: 初回手術の15年後に再発が確認された頬部小唾液腺原発多形性腺腫の1例. 日口外誌 28: 2047-2051 1982.
- 19) 三角洋介, 矢島裕子, 他: 頬部に発生した多形性腺腫の1例. (抄) 口科誌 31: 468 1982.
- 20) 梶 隆一, 白数力也, 他: 頬粘膜に発生した良性多形性腺腫の1例. (抄) 日口外誌 24: 1386 1982.
- 21) 河野信彦, 亀井敏昭, 他: 頬部に発生した多形性腺腫の1例. 日口外誌 29: 148-150 1983.
- 22) 宇沢俊一, 白川正順, 他: 頬部に発生した多形性腺腫の1例. 日口外誌 29: 2348-2352 1983.
- 23) 藤元栄輔, 坂下英明, 他: 頬粘膜に発生した多形性腺腫の1例と文献的考察. 日口外誌 31: 766-770 1985.
- 24) 笠倉達雄, 朝倉昭人, 他: 頬部にみられた多形性腺腫の3例. 日口外誌 31: 675-681 1985.
- 25) 伴 邦晃, 長島駿一郎, 他: 頬部に発生した多形性腺腫の1例. 口科誌 35: 935-939 1986.
- 26) 久保谷聡明, 賢田 博, 他: 頬部に生じた多形性腺腫の2症例. (抄) 日口外誌 32: 2568 1986.
- 27) 川村 康, 高井克彦, 他: 頬粘膜に発生し再発を繰り返した多形性腺腫の1例. 日口外誌 33: 432-436 1987.